

位置精度で浸水域の予測が可能になるという。

市は南海トラフ沿いなどで巨大地震が発生した場合、1時間半後に最大で高さ約3・7メートルの津波が押し寄せると想定。防潮堤が機能しないなど最悪の事態での浸水域を予測し、きめ細かい情報を住民に提供して最適なルートでの避難につなげる。

防災対策を助言する東大地震研究所の古村孝志教授（地震学）は「駿河湾のある地点で観測した津波は川崎に来る津波とよく似ており、非常に高精度で予測できそうだ。成功すれば、このモデルを全国や世界に広げられる」と話す。

ただ、AIやパソコンに頼りすぎるのは危険だ。狭い路地に流れ込む津波や、木造家屋の倒壊は計算結果に反映されないため、予測には限界もある。

富士通研究所の大石裕介シニアリサーチャーは「技術的には2、3年後の完成を目指す、そもそも精度100%のAIはない。不確定さが伴う情報の性質を理解して活用すべきだ」と強調する。

重要な投稿を抽出

被災者がツイッターや無料通信アプリ「LINE（ライン）」などの会員制交流サイト（SNS）に寄せた投稿をAIの言語処理で分類し、救助や避難などに役立つ動きも本格化している。

西日本豪雨でも多くの被災者がSNSを通じて救助要請や被災状況の報告を行った。ただ、東日本大震災では発生当日だけでツイッターへの投稿が約3300万件に達しており、膨大な情報から重要なものをいかに取り出すかが課題だ。

そこで情報通信研究機構は、災害に関連するツイッターの書き込みをAIでリアルタイムに抽出し、内容や地域ごとに分類して表示する情報分析システム「D-SUMM（ディーサム）」をインターネット上で公開。昨年7月の九州北部豪雨では、JR久大線の鉄橋流失を伝える投稿をいち早く把握し、大分県が対応に動くきっかけを作った。

秋に電腦防災訓練

南海トラフ地震の津波被害が予測されている自治体や住民、ラインの運営会社などは今年秋、ディーサムを使った“電腦防災訓練”を計画している。

訓練では、住民が臨時のインターネット掲示板やラインに救助要請や被害の状況などを投稿。ディーサムで重要な情報を分類し、災害対策本部のスクリーンに表示して対応に役立てる。

訓練を実施する「電腦防災コンソーシアム」は4月、AI防災の実現に向けた提言も公表。AIとSNSを組み合わせることで、困窮した被災者や避難所を早期に見つければ、災害関連死の防止にもつながるとしている。

コンソーシアムの共同代表を務める慶応大の山口真吾准教授（情報通信政策）は「ファクスやホワイトボードによる情報集約では不十分だ。AIを使えば100万人の住民と自治体とのコミュニケーションを確立できる」と話す。

キーパーソン・インタビュー 教育はエンタメー「ビリギャル」著者の坪田信貴さんが吉本興業役員に就任したワケ



毎日新聞 2018年7月16日

「エンターテインメントの会社の知見は教育現場でも100%生かせる」。吉本興業の社外取締役役に就任した理由を語る「ビリギャル」著者の坪田信貴さん＝中澤雄大撮影

金髪姿の制服女子高生の表紙が印象的だったベストセラー本「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話」（KADOKAWA）の刊行から約5年。「ビリギャル」の流行語を生んだ著者で、塾経営者の坪田信

貴さんが6月下旬、吉本興業の社外取締役役に就任したことが分かった。「教育」と「お笑い」ビジネス。一見、結びつきそうにない世界だが、吉本興業の狙いはどこにあるのか。坪田さんに就任に至るまでの経緯と今後の抱負などを直撃すると、二つの異なる世界が持つ不思議な親和性が浮かび上がってきた。【中澤雄大／統合デジタル取材センター】

よしもと社長「めっちゃ、オモロイ。君さあ、ウチの役員にならへん？」



—あの「よしもと」の役員になったとは驚きました。坪田さんが世に出るきっかけになった著書「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話」。映画化されて、「ビリギャル」は流行語にもなった。

坪田 「ビリギャル」がヒットした段階で名前が知られて、多くの企業研修などの講師として呼ばれるようになり、吉本興業から「文化人」枠で所属しないか、というお話をいただいていたんですね、「所属タレント」として。でも、いろいろなタレントさんから冗談半分で「やめた方がいいよ」と忠告されました。「有名になる前だったら入って意味があるけれどね」って。ところが、キングコング西野さんだけは「よしもとは良い」と言う。その心を聞いてみたら「劇場が圧倒的にあるし、お客さんとふれあうことができる。もちろん知名度もある。そして何よりも、先進的でいろいろなことにチャレンジしている」と言われたんですよ。

—確かに全国津々浦々、老若男女に知られていますよ

ね。

坪田 そう、トヨタ自動車と吉本興業は知られているみたいだね。西野さんは「吉本興業はいろいろなことにチャレンジしている。まさに転換期だから、坪田さんが活躍する機会って、めちゃくちゃ多いと思いますよ。仕事を取ってきてもらう機関として、既に有名な人が必要かといえ、そうじゃないかもしれないけれど、活躍の場をつくるのであれば、こんなに最高の会社はない」と言うんです。他の芸人さんたちと意見が真っ二つに割れたんですね。吉本興業のタレントになるんだったら、「お笑い色」が付いちゃうじゃないですか、分かります？（大笑い）。

—教育のプロでも、芸能界ではシロウトですよ。 「ビリギャル」著者として、子供たちを教える際のコミュニケーション能力の高さを買われたのでしょうか。

坪田 コミュニケーション能力は教育に必要ですよ……でも、世間的イメージとしては、お笑い芸人になっちゃうかもしれない。どうしようかな、と思っていたら、西野さんを通じて吉本興業の大崎洋社長と食事をする機会ができたんです。僕からしたら「芸能界のドン」ですよ、その人がいきなり会わないかと。でも、僕はここでノーと断るのは違うな、と思ったんですよ。「ぜひお会いさせてください」と言いました。

普段の坪田で行こうと思、ユニクロのシャツ姿でお邪魔しましたよ。で、いろいろなお話をさせていただいて。その日のうちに「めっちゃ、オモロイ。君さあ、ウチの役員にならへん？」って、いきなり初対面で言われたんです。こっちは、エッ！？ですよ。



そのときは未来がこういうふうになっていくから、こういうことをしていきたいとお話ししたんです。

人生百年時代 「エンターテインメントが主流になる」

将来迎えるであろう「人生百年時代は、エンターテインメントが主流になる。伸びしろが半端なくある吉本興業はキープレイヤーとして、これから面白くなる」と断言する坪田さん＝中澤雄大撮影

例えば「人生百年時代」にあって、1918年に生まれた人が、どのくらい100歳になっているか……（人材・組織論の世界的権威とされるロンドン太ロンドン・ビジネス・スクール教授の）リンダ・グラットンさんによれば、1%くらいの割合です。だから2014年生まれの人

の半分以上は100歳まで生きることになります。今までは20歳くらいまでが勉強して、60歳まで働いて、その後20年くらいの老後でしたけれど、これからは、60歳以降さらに40年生きる。老後が長くなるから、実質働いている期間でお金をためる必要があるけれど、ただでさえ厳しい。だから、実際もっと働かなければいけない時代になっていく。でも実はAI（人工知能）やロボットが、基本的には食料生産とかをやってくれるようになる。食べるためにこれまで働いてきたのが、これからは食べるためには働かなくていい。輸送だって、ドローンが自立的に動いてくれたら、流通もそんなにコストがかからなくなる。実質コストがゼロ、生活するコストがほとんどかからない時代になれば、それじゃあ働くって何なの？という話になってきて……時間がすごく余ってくるから、そこから実はエンタメの時代になるんです。今だって実際、CMだって大半がパズドラ、モンストだとかゲームじゃないですか。その業界が一番お金をもっているから、CMをたくさん出しているんです。

大転換期に求められるのはコンテンツ

――なるほど。

坪田 「コンテンツ・イズ・キング」と言われる時代で今、メディアはたくさんあるじゃないですか。となると、求められているのはコンテンツなわけですよ。コンテンツを創れる人、コンテンツを持っている人が一番強くなれる。「百年暇つぶし時代」と言われるような時代へ向かっていくなかで、デジタル化や世界進出、地方創生という側面もある。今後はそれがキーになっていくので、「吉本さんはキープレーヤーになれますよ、これから面白いですね」と言ったんです。

そしたら大崎社長は「それ、『地方』『デジタル化』『アジア進出』は、僕がやりたいって言っていたことなんだ。だけど、なかなか進んでいないんだよね」と言われた。僕が「逆にそれって伸びしろハンパないですね」と応じたら、大崎社長が「忙しいやろうから、役員に無理じゃない程度でやってほしい」って。

昔、サッカーの本田圭佑選手が「ACミランの10番を付けるチャンスがあつて付けられないやつはいるんか」と質問に答えたのと同じで、「吉本の役員にならへんか」と言われて断るのもおかしい話だと。

――まるきり知らない世界のトップに声を掛けられて、戸惑いはなかった？

坪田 いきなりボードメンバー（取締役会）になるわけじゃないですか。それも「芸能界のドン」から声を掛けられて……僕も経営者の端くれでもありますし、これまでいろいろ経営もしているし、目を掛けていただけるのはうれしい。ふと思ったんです、「大崎さんってカリスマだな」って。普通、損得や失敗したときのことを考えるんだけど、僕は「全力でこの人を男にしたいな」とシンプルに思った。今さら何ができるというわけではないですが、吉本の中興の祖にできるんじゃないかと思っています。

――吉本興業は創業105年を超す歴史がありますね。

坪田 ええ、今がまさに大きな転換点を迎えています。劇場からテレビへ、大阪から東京へ出て行って（1978年に東京進出。2009年から旧新宿第五小学校の校舎に本部を設置）……どんどん時代の転機が訪れたなかで、「吉本アジア」は、大きな歴史の中に名を残すんじゃないかと。それを手伝いたいと思ったんですね。

「ビリギャル」だけじゃない 社会人15万人相手に講演・研修

――坪田さんは塾経営者であり、「ビリギャル」著者としてのキャリアがあります。さらに近年は社員研修などの講師を多く務めている。そうしたコミュニケーション能力や経験、新たな発想を経営に生かしていくと？

坪田さんの塾の教え子のひとり、小林さやかさん。「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話」のビリギャル「さやかちゃん」のモデルとなった。坪田さんのポジティブな指導法で成長、今では各地で講演をするなど魅力的な大人になっている＝ブライندスポット提供



坪田 そうですね。僕はIT系がすごく得意だし、語学も得意（TOEIC990点満点）ですが、一番得意なのは人をやる気にさせたり、ビジョンを提示したりするチームビルディングなんですよ。

これまで約400社の社員研修で、約15万人を対象に講演や研修をしてきました。大企業、中小企業の社長さんたちの思い、現場がどう考えているかというズレをめちゃくちゃ実感してきました。大企業になればなるほど、トップのビジョンは現場にはなかなか伝わりづらい。やれと言われるからやるだけで、吉本に限らず、どこも似ています。その部分を伝えるのが役割かな、とビビッときた。

もう一つは、いわゆる「勉強ができない」という人たちをできるようにすることで、自己肯定感や自信を付けさせて社会で活躍できるようにしよう、と塾を経営しています。それって、吉本興業とやっていることは同じだな、と思ったんですよ。学校や社会をある意味ドロップアウト、うまくいかない、ちょっと個性的な人たちを、付加価値を付けて「スター」にしている会社じゃないですか。

――普通の社会には収まらない、「笑い」の一芸に秀でた集団。6000人も所属しているそうですね。

坪田 どちらかと言えば、その人たちは、学校では先生たちから煙たがられるような存在だったんですよ。そうした部分にちゃんと光を当てて、活躍の場をつくっているわけです。47都道府県に住んで地域活性化に取り組む「住みます芸人」のプロジェクトや、「ユヌス・よしもとソーシャルアクション（y y SA）」（ノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌス氏が提唱する「ソーシャルビジネス」によって、貧困や失業、環境破壊などの社会問題をビジネスで解決する取り組み）も始めています。

――将来に向けたネットワークをつなげようとしているわけですね。

坪田 既にアジアにも進出してね（6カ国・地域に芸人が移住。現地の言葉や慣習を学び生活し、日本のエンターテインメントで世界を笑顔にすることを目指している）。まさに「場づくり」なんですよ。そもそも経営は、活躍する人材の場づくりじゃないですか。今、それを積極的にやっている会社だな、と内部に入って感じています。実際に仕事を始めたのは、今年1月ぐらいからですが、IT化の統括プロデューサーや他の会社と組んで教育事業もやらせてもらっています。



「学ぶ」ことは本来、楽しいこと 教育現場でも「笑い」は役立つ

――笑いを通じて何かすると？

「ソーシャルビジネスや教育は真面目になりがちですが、実際は楽しいはずなんです。学問って本当はエンターテインメントなんです。だって、新しいことを知って楽しいじゃないですか。インタビューでは常に笑顔が絶えない吉本興業の社外取締役役に就任した坪田さん＝中澤雄大撮影

坪田 ソーシャルビジネスや教育は真面目になりがちです。そうじゃなくて、実際は楽しいはずなんです。学問って本当はエンターテインメントなんですよ。

――楽しみながら学ぶと？

坪田 そう、だって、新しいことを知って楽しいじゃないですか。それをなぜか姿勢を正して、笑いもせず、私語もせず、先生の話聞く……礼儀や道徳とセットにされているような授業。本当は立ちながらでも、走りながらでも、ダンスしながらでも学ぶことはいっぴいできる。そういう意味で言うと、学びのエンターテインメントへの回帰だと思っんですよ。元々はそうだったはずなのに、切り分けされちゃって。だから、笑いながら楽しみながら、いろいろなことを学べるようにしたいなと思っています。

――吉本興業の企業理念には「笑いを通じて社会を良くする」とありますね。

坪田 「ラフ（笑い）＆ピース（平和）」ですよ。それをもたらそうというのが、吉本興業の理念ですね。そこに共感を覚えました。

――まずは6000人のマネジメント、スケジュール管理などをスムーズにできるよう

にするのが役目だとか。

坪田 そういうのも含めてもっと効率化できると思います。従来の吉本興業は「B to B」(Business to Business、企業間取引)の会社なので、それを「B to C」(Business to Consumer、企業と消費者・一般大衆間の取引)にしていく。いかに顧客に直接つながれるようにしていくかという部分ですね。「B to C」を重視するなかで、顧客と接してきた僕に白羽の矢が立ったわけです。

しかも、いわゆる世間的にはあまり評価されてこなかった人を育てる点に価値を見いだす共通点が多くあったわけですね。

通常の社外取締役って月に1度、取締役会に出て、お茶を濁すような感じだと思っていましたけど、吉本はめっちゃ仕事をつくるんで、ほぼ毎日来ていますよ(笑い)。僕は地方とアジアという観点において、大崎社長と岡本昭彦副社長のツートップを男にしたい。めちゃくちゃコミットする。エンターテインメントの会社の知見って、教育現場でも100%生かせるので、僕にとってもむしろプラスになると思う。

図式にはまらずに「ジョブ・クリエイター」を目指せ

――1000人以上の子供たちを個別指導してきた坪田さんのやりとりが、今度は芸人さんたちを通じて実践・発信していく、ということですか。

坪田 より笑顔になって、皆が楽しみながら学べるようになって。世の中が笑いと平和にあふれる国、世界になればいいな、と。そのために尽力しなければいけないと思う。

学生時代を米国などで送りました。ITが産声を上げてきた時期で、プログラムや言語、仕組みとかも単純に知ることが楽しいから、いろんな道具を使えるようになりたいと思っただけなんです。友人に天才的なハッカーみたいな子がいて、その子と一緒にやり始めたんですよ。僕の周りで「天才」と言われている人たちは、皆好きで学んでいるんですよ、単純に。苦労や努力というよりもエンタメなんです。だから成長している。

「これからの時代に必要なのは、仕事を創っていくこと。面白くない仕事はAIやロボットがやるようになる。人間は面白い仕事をやる。作業とクリエイティビティーが分けられるようになってくるんじゃないですかね」と分析する吉本興業社外取締役の坪田さん＝中澤雄大撮影

それこそ思ったのは、これからの時代に必要なのは、仕事を探すことじゃなくて、仕事を創っていくことじゃないかなと。ユヌスさんもまさに「ジョブ・シーカー(求職者)じゃなくて、ジョブ・クリエイター(創作者)になるべきだ」と言われていた。僕も当時まさに同じことを思っていたんですよ。

就職活動って、誰かがつくった仕事があって、その人手となるということですよ。そうしたときに「天才」とは呼ばれない。地頭、才能と言われるけれど、何なんだろうと。日本社会では良い大学を出て、大きな良い企業に入ったら評価されるじゃないですか。

――図式が決まっていますね。

坪田 大学受験時に一番そこで自信みたいなものが変わってくるんじゃないかなと思うんです。そこで人生がある程度決まるのであれば、逆にここで自信を付ければ、人は変わるんじゃないかなと……地頭や才能なんかも勉強ができるできない部分で言われるでしょ。それが「地頭」だと思われているので、そこを覆せれば日本はもっとジョブ・クリエイターが増えると思ったんですよ。

僕は人生ですごく重要なのは仲間だと思っています。その仲間がすごく後ろ向きだと面倒くさいけれど、みんな前向きで同じようにチャレンジしようと思ったら、互いに励まし合いながら楽しめるじゃないですか。子供たちにもっと前向きで、もっと楽しく、人生ついでいろいろできるんだぜ、と思える人たちが増えていけば、もっと面白くなる。

面白ければ、変わることができる

――吉本興業の芸人さんたちにつながりますね。

坪田 まさにクリエイター集団ですもんね。やっぱり、面白くないと、みんな、やろうとしないですもんね。面白くない仕事はこれから、AIやロボットがやるようになります。人間は面白い仕事をやる、面白い仕事をつくっていく時代になるんだと思います。それが大きな転換点だと。作業とクリエイティビティーが変わってくる、分けられるようになってくるんじゃないですかね。

要は教育って、未来がこう変化していくから、それに合わせて教育していかなければならないでしょ。それが明治からずっと変わってきてなくて、2020年度から本格的に始まる大学入試改革でようやく変わろうとしています。でも、社会で対応できるかという、その社会が到来していないから、どう教育して良いか分からないんですよ。

だから、教育って、子供たちだけじゃなくて、大人もどう変わっていくかなんです。僕たち自身が変化していく。変化をするためには、面白くないことには、みんな変化したくないんですよ。でも、面白かったら変化したいんです。なので、これはどう面白いんだよと、どう面白く伝えていくのか、ということは芸人さんたちから学ぶのが一番良いんじゃないかなと思うんです。

未来で何をやるかが大事 年齢や肩書から想像力は生まれません

――年齢や肩書からは想像力は生まれませんというのが持論だとか。

坪田 クリエイティブじゃなくなりますよね、枠にはめちゃうというか。僕は年齢とか公表していないんです。元々、育った環境が違うのに同じ学年単位で考えることがそもそもおかしい。米国時代の友人からのメールで「最近日本人3人に会ったんだけど、最初の方で年齢を聞かれた。なんで日本人は僕の年齢を聞くんだ？俺が35歳、32歳、25歳だとか、年齢の違いに何か関係あるのか」と聞かれたんです。

――仕事や想像力に年齢や国籍は関係ないが、年が若ければ、すごいなと感じる。

「過去に何をやったかも大切だけど、未来で何をしようとして、そのために何をやっているのかという方が断然大事。教育って本来そうじゃないですか。面白かったら変わることができる。どう面白く伝えていくのか、ということは芸人さんたちから学ぶのが一番良いんじゃないかな」。年齢や肩書などで「枠」にはめるようなものの見方(ラベリング)をしない坪田さん＝中澤雄大撮影



坪田 それ自体がラベリング(レッテル貼り)なんですよ。ラベリングしたうえで、すごいな、じゃないですか。もちろん過去に何をやったかも大切なんですけれど、未来で何をしようとしていて、そのために何をやっているのか、という方が断然大事だと思っているんです。教育って本来、そうじゃないですか。だけど、明治からある程度決められたことは、たいていのことは範囲だけを微妙に変えて、教育しているので、社会人になったら、オマエ何勉強してきたんだ、みたいなことになりがちです。本当は過去のことではなくて、未来を見てほしいですね。

――今まで培ってきたことの結果だけじゃなくて、経験知見を次のことにいかに生かすかが重要だと。ご自身の経験知見を、芸人さんたちとともに発展させていこうとしているわけですか。

坪田 そうですね。お伝えしたいのは、皆さん、吉本をどんな会社だと思われているか分からないですけど、入ってみて、めっちゃ良い会社だと思いました。社員と話していて感じたのは、みんな、笑いが好きだ、と言うんですよ。

――大阪の会社という一般的なイメージを、まさに変えていこうとしていると。

坪田 そうそう、「大阪」のイメージはもうラベリングされているんですよ。大崎社長はそれを変えようとしているんですよ。そのお手伝いさせてもらおうということです。一員にさせてもらうことはありがたいなと思う。吉本は意外と良い会社だと強調しておきたい。世の中の人はもしかしたら、あんまり良くは思っていないんじゃないかな。

――昔ながらの興行のイメージもあるかもしれないですね。

坪田 でも、中に入ってみると、全然印象が違った。すごく先進的だし、前向きだし、社員さんたちがなんだかんだ言って、謎のモチベーションで頑張っている。大崎さん、岡本さんのカリスマ性が、経営者としてすごい。僕も勉強させてもらいたいし、日本の他の会社でも応用できるんじゃないかなと考えています。それが僕の裏テーマですね（笑い）。

「雨が恐ろしいんよ」 逃げ遅れた娘、最後に父と話した 朝日新聞 2018年7月16日
崩れ落ちた次女の家と捜索を見守る清原守さん＝2018年7月8日午後5時41分、広島県熊野町川角5丁目、高島曜介撮影



「次女と孫2人を早う無事に見つけてやりたい」。

広島県



熊野町川角5丁目の災害現場で、捜索活動を見守り続けてきた男性の願いはかなわなかった。県警は14日、見つかった3人の遺体が介護福祉士の上西（かみにし）千恵美さん（44）と、息子で中学2年の優太君（13）、小学6年の健太君（11）と発表した。

清原守さん（71）＝同町平谷2丁目＝は8年前に妻を亡くした。仕事帰りに千恵美さん宅に寄ると、一人暮らしを案じて、煮物などを作って待っていてくれた。「しっかり者の自慢の娘じゃった」

病院に車で送迎してもらった6日午前、「昼飯でも食べよう」と誘った。だが、「大雨で子どもたちが早く帰ってくるから、家にいないと。また今度ね」と千恵美さんは言い、別れた。それが最後に見た姿になった。

午後8時ごろ。「お父さんは避難せんのか？」と千恵美さんから携帯に電話があった。「せんと思う」と伝えると、「そう……。雨がひどくて恐ろしいんよ」と不安そうな声で話し終えた。

経験のないほどの豪雨に身を案じ、7日朝に電話を鳴らしたがつながらない。家を訪れると、土砂や大きな岩、がれきが散乱していた。1階部分は跡形もなく、2階だけがかろうじて形をとどめた状態で倒れていた。千恵美さんの夫（53）は救助されたが大けがをして入院した。

3人とみられる遺体が見つかったのは9日の昼前。千恵美さんは、貴重品が入った白いバッグを左腕にかけていた。「緊急の時にすぐ避難できるように」と用意していたバッグだった。健太君が背負っていたリュックからは懐中電灯が見つかった。「千恵美が用意してやったんだらう」。3人は寄り添うように並んでいたという。優太君は手ぶらだったと警察から聞いた。「弟思いの優太が必死にかばおうとしたのかもしれない」

何度も最後の電話を思い出し、悔いが募る。「はよう避難せい、ときつく言ってやっつけば違ったんかのう」（高島曜介）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行